



●すすんで勉強する子ども

●おもいやりのある子ども

●心も体もたくましい子ども

9.15 大船渡市内小学校陸上競技記録会



9月15日(木)、三陸総合運動公園(はまなす運動公園)を会場に大船渡市内小学校陸上競技記録会が開催されました。この記録会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、3年ぶりに市内の小学校が一堂に参集しての記録会となりました。

記録会当日は、朝から爽やかな青空が広がり、各学校が準備した色とりどりの横断幕や応援旗が、出場する選手を励ますようにはためいていました。特に、盛小の応援リーダーの子どもたちが振る黄色の応援旗は、空の青と山の緑に映えて、一段と目立っていました。

盛小学校の主な入賞者は次のとおりです。

競技も応援も精一杯がんばり、やりきった満足感あふれる笑顔がとてもまぶしく見えました。応援ありがとうございました。

種目	氏名	記録
6年女子 800m	古澤優衣	2'58"6 (2位)
6年男子 800m	船砥鳳輝	2'52"2 (5位)
6年女子 100m	三浦咲彩	16"7 (3位)
5年男子 100m	迎山大渡	15"5 (2位)
5年女子 200m	石橋花菜	37"7 (2位)
5年女子リレー	石橋花菜 畠山莉緒 鈴木陽乃 新沼瑠宇	1'11"0 (3位)
5年男子ボール投	村上謙心	46m72 (1位)
5年女子ボール投	鈴木陽乃	20m0 (6位)
共通女子走高跳	畠山莉緒	1m5 (5位)



盛小学校ホームページ
(ブログ) 携帯サイト



「盛の子」学びの力を着実に！さらに高みへ！

先日お知らせしましたが、4月19日(火)に実施した「全国学力・学習状況調査(6年)」の結果が学校に届きました。学校では、岩手県・全国結果との対比も含めて、その結果の分析を進め、児童の実態に即した学習指導を推進していきます。

そもそもこの調査の目的は次のとおりです。

【目的】

- 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

この目的の中で、学校現場に直接関わるのが、“学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。”という部分になります。

単純に、盛小学校と岩手県・全国の平均正答率と比較すると次のようになります。

【結果】

※ 先日配付のお便りでは、もう少し詳しい結果が記載されています。

	平均正答率(%)		
	国語	算数	理科
盛小学校	74	64	70
岩手県	67	62	63
全国	65.6	63.2	63.3

このように、平均正答率を比較すると、盛小学校の子どもたちは、先生方の地道な指導と、ご家庭の温かなご協力のもと、着実に力をつけていると読み取ることができます。特に国語・理科では岩手県・全国に比べて6～7ポイントも上回っています。

しかし、前述のとおり、この調査は、教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるのが目的です。そこで、もう一步踏み込んで内容を分析する必要があります。すると、次のような点で課題が見えてきました。



【課題】

- 1 国語
 - 目的に感じ、文章と図表とを結び付けて必要な情報を見つける。
 - 目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約する。
 - 自分の主張が明確に伝わるように、文章全体の構成や展開を考える。
- 2 算数
 - 図形の構成の仕方を捉えて、自分が考える解答に至るまでの過程を説明する。
 - 単位量あたりの大きさや割合について理解し、課題解決に至る自分の考えを説明する。
- 3 理科
 - 観察、実験で得た結果について分析して、解釈し、それを結論(まとめ)の根拠として表現する。

【手だて】

課題が明らかになるということはとても良いことです。その課題が、さらなる高みへの道標になります。学校では、校内研究等でこれらの課題解決に向けた手だてを協議し、実践を進めたいと考えています。まずは、学校全体で、次の2点においてさらに子どもたちに力をつけるよう指導・支援していきます。

- ★1 文章や資料等(図・表・グラフなど)の内容・意図を速く、正しく読み取る力
- ★2 自分の考え(解答に至るまでの過程など)を明確に説明・表現する力《out put》

現代の子どもたちは視覚から学習内容を理解することに長けています。児童一人一人がタブレットを利用できる環境にあることから、ICT(情報通信技術)を有効に利活用し、より確かな学力定着を図っていきます。それは、学びの基本である“読むこと”“書くこと”などを軽視することという意味ではなく、これまでと同様に、“読むこと”“書くこと”などを大事にしたうえで、より広くより深く学ぶための手だてとしてタブレット等の活用を推進していきたいとの考えからです。